



K.M 様

愛用ミシン:ジャノメ

ミシンが縫ってくれたもの

突然の別れとは、人に限らずだ。

生まれ育った実家と、お別れする時が来た。7年前に父が逝き、年老いた母がひとり住み続けて来たが、今夏、母は兄の家へ同居、実家は人手に渡ることとなった。父の思い出、家族の思い出いっぱい、この家を離れたくない、母の気持ちを思うと辛い。しかし、売れそうもない築100年の古屋敷に買い手が見ついた。兄の家には、到底入りきれない家具や古道具も、そのまま置いて行っていいという。母も心身の老化が急速になってきていて、何かと心配なことが続いている。これが思い切るタイミングだった。

「この桐タンスは、お嫁入りの時の。でも持っていけないか。あの柱時計は……」

母は家の中を見渡しては、ため息をつく。窓の外の蔵が目に入る。父が亡くなってから、入ったことがないのではないか。

「お母さん、蔵の中も見ようか」

よっこらしよと、重い扉を開ける。中は意外と物は少なく、ガランとしていた。刺しゅう布のカバーが掛けられた、古い足踏みミシンが目に入る。

「わあ！懐かしい」

まだ家にあるとは思わなかった。

JANOME
100
YEARS
since 1921



カタカタ、カタカタ。若き日の母の背中が浮かぶ。

カタカタ、カタカタ。ミシンの音が聞こえるのは、いつも夜だった。勤め先から帰った母は、夕食を作り、私を寝かしつけ、すべての家事を終えてからミシンに向かっていた。

タタタタタ。もう布団の中にいる私は、その音の子守唄のように聞きながら眠った。

学校で使う小袋やブラウス、いろんなものを縫ってくれた。どれにも、私の好きなイチゴの刺しゅうを目印にワンポイントしてくれた。夜なべをしていることもあり、子供心にも大変だと思ったが、縫い上がったものを私に見せる母は、いつも嬉しそうに生き生きと生きている。しかし娘の私は、裁縫が大の苦手だった。

中学校に上がると、授業で電動ミシンを使うようになった。タタタ、と走る電動ミシンの速度に、手がついていかない。早く動く針が怖くて、固まってしまう。

「もう、いや！」

できあがらないブラウスを持ち帰り、放り投げると、


「足踏みミシンなら、大丈夫よ」

と母が言った。

「自分のスピードでゆっくりと、休み休みでいいのよ」

恐る恐るペダルを踏む。カタ、カタ……タタ、タタタ、タタ。ゆっくりと少し進めては足を止め、またゆっくりと進める。ほんとだ。針が私の足に合わせて、スローに布の上を歩いてくれている。時間はかかったが、なんとかブラウスを完成することができた。

それからも裁縫は好きになれなかったが、足踏みミシンのペダルを踏む感覚が大好きになった。足を乗せていると、なんだか心が落ち着く。時には母の真似をして、さも上手に何かを縫っているようにエア裁縫をし、少女漫画で見たゴージャスなドレスを空想の中で作り上げた。悲しい時や辛い時もミシンを踏んだ。父に叱られ台に顔を突っ伏しながら、友達と喧嘩してカバーに涙を



拭わせながら、好きな人を思い頼杖をつきながら、踏んだ。足踏みミシンは、多感な頃の私の心も縫ってくれたのだ。しかし家を離れ、いつの間にかミシンの存在も忘れていた。

「明日の朝まででしょ？」

母がいきなりボソッと呟き、ミシンの前の椅子に座った。

「え？」

「あなたのお弁当袋。明日、遠足に持っていくんでしょ？」

母は踏板に足を置いた。キッと小さく音をたてたが、動いてはいない。母は、カバーが掛けられたままの台の上で手を動かし始めた。

「おかあさ……」

私は声をかけるのを途中で止めた。

あの幼い頃に見た母の背中が、そこにあった。皺だらけの手の甲が、見えない布を操るように動いている。私を育ててくれた手だ。私たち家族の人生を縫い上げた手だ。そして母は今、この家の思い出を一生懸命縫おうとしているのだ。

「お母さん」

「なに？」

「イチゴの刺しゅう、忘れずにしてね」

「わかってるわよ」

母は振り向かず、楽しそうに返事をした。